



あまも
福島大学
震災10年目のフレーズ
【8】

クロージングセレモニーでの記念撮影

シンパシーからエンパシーへ。 F.A.P. を通じて福島ならではの グローバル人材育成を展開

その前に、少しでも私のことをお話させてください。私の母親は日本人です。子どもの私に日本語を楽しく覚えてほしいと、母は日本語の漫画やゲーム、偉人伝などをたくさん買ってくれました。その中に新渡戸稲造の本があり、「太平洋の架け橋になる」という言葉に心打たれました。そして私は子ども心にも「大きくなったらカナダと日本の架け橋になる」と決めました。

2007（平成19）年、ご縁があって来日し、福島県国際交流協会に働くことになりました。2010（平成22）年、特任専門員として福島大学に雇用され、

—— Fukushima Ambassadors Program（通称F.A.P.）短期プログラムを始められたきっかけを教えてください。

国際交流センターを立ち上げるプロジェクトに関わりました。多文化共生の福島を作ろうと気合を入れて取り組んでいた矢先、震災・原発事故が起きました。もう少しでセンターが立ち上がるというタイミングで、福島が世界から注目される存在になってしまいました。様々な誤報が世界中に流れてしまったことに心が痛みました。確かに大変な思いをしているけれど、福島の人々は、みんな前を向いている。そのことをきちんと伝えたいと思ったことがきっかけです。

—— 2012（平成24）年4月に誕生した国際交流センターの最初の事業となったF.A.P.について教えてください。

F.A.P.は、福島大学の多文化



国際交流センター 講師

マクマイケル・ウィリアム

1982年生まれ、カナダ・バンクーバー出身。2007年に国際交流員として福島県に来日。2010年からは福島大学に採用され、震災後は海外への福島の情報発信や、風評被害の払拭及び世界と福島をつなげるグローバル人材育成のための教育プログラムの設計に尽力。自他共に認める「カナダ人の福島ファン」として、これまで海外から数多くの留学生や研究者を福島に招聘し、福島第一原子力発電所の視察を含む県内各地での共同フィールドワークを通して、福島の課題が世界に正しく伝承されるための活動を続けている。令和元年度学長教育奨励賞（グローバル教育）受賞。最終学歴は修士号（経済学）。

混住型短期留学プログラムです。「多文化混住型 (mixed-group dynamics)」とは、国籍・母語、専攻分野、出身大学など異なる学生同士が、ひとつのテーマに基づく共同学習を行うことで、多面的な意見交換が生み出され、従来にはない発想が創出されることを期待するプログラム形態を指します。福島大学と協定を結んでいる海外の大学で学ぶ学生を約2週間のプログラムに招き、福島大学及びアカデミア・コンソーシアムふくしま加盟校の学生たちと共に、復興過程にある福島の震災・原発事故直後の課題、今直面している課題、未来の諸課題を多角的に捉え、世界に発信するスキルを育成しようというものです。これまで14回(2019(令和元)年8月現在)実施しました。アメリカ、オーストラリア、カナダ、韓国、中国、ドイツ、トルコ、スコットランドから、209名の学生がこのプログラムに参加し、のべ600名以上の福島県内の学生と共同学習を行ってきました。

た短期留学生もいました。他にも相双地方での復興ボランティア活動、福島第一原子力発電所の廃炉現場や中間貯蔵施設の見学、避難区域解除後に先進的なまちづくりが行われている地域でのキーパーソンによる講演、参加者の専門分野に応じた有識者による講義など、様々な学習機会を取り入れることで、福島を包括的に学び、参加者全員が福島の今を世界に発信できる「Ambassador(友好外交官)」となることを最終的な目標に掲げております。

——F.A.P.を続ける中で特に意識してきたことは何ですか。

プログラムの立案です。日々、状況が変化しておりますので、毎回同じではなく、私自身学びながら、最新の福島と課題を伝えるよう努力してきました。振り返ると当初は、福島の偏見や誤解をなくして、本当の福島を知るといのがメインでした。震災・原発事故から丸10年になろうとしている今も、まだそうした側面もあるのですが、どちらかと言うと「福島を学ぶ」から「福島から学ぶ」に変わってきています。課題解決先進地域とも言われている福島を通して、地方の活性化であったり、食の安全、持続可能な新しいコミュニ



果樹園での桃狩り体験

ティづくりなど、最先端の実践と知識が集約されている福島からしっかりと学べるプログラムにしたいと心を砕いてきました。

——参加された学生の皆さんの感想や、成果など教えてください。

気づきがすごく、毎回、感動の連続です。人生観が変わるような学びがあったという留学生が多いです。「当初、来る前は福島第一原子力発電所の視察に一番興味があったけれど、振り返ると一番心に残っているのは、地域の皆さんとの交流でした」とか、「人生で一番内容の濃い2週間だった」とか。F.A.P.をきっかけに福島で暮らし始め、現在は東京に引っ越された方もいます。つながりは途切れることなく、今もSNSで皆さんとつな



津波被災地域での災害ボランティア活動

がっています。「英語というツールを使うことで、こんなに世界が広がるなんて」とか「こういうことがしたくて福島大学に入っただんです」と話してくれた日本人学生もいました。

おかげ様で2019(令和元)年に行われたF.A.P.は、海外メディアに取り上げられたこともあり、参加申し込み数が増え、キャンセル待ちが大勢出たほどでした。F.A.P.をきっかけに新たに5つの大学と協定を結べたこともうれしい成果です。

——F.A.P.のこれからをお聞かせください。

実は、F.A.P.に参加する日本人学生向けに「福島人」としてのアイデンティティを持って英語で話せるよう、福島の復興につい

て英語で学ぶ授業を開講しました。この部分は今後、私の研究分野としてさらに深めたいと思っていますところ。また、国際PBL(Project-Based Learning)型プログラムとして、学生目線で福島の情報発信を行うことを目的とした新しい国際共修授業の設計も行っています。情報リテラシーなども含めて、福島でしかできないグローバルな人材育成を展開していきたいです。対象となる学生は、外国人と日本人と両方を考えています。

コロナ禍の今、私はより一層福島で学ぶ重要性を感じるようになりました。これからのグローバル教育は、エンパシー(共感力)が、キーワードとなっていくことでしょう。福島へのシンパシー(同情)からエンパシー(共感)へ。地域の方とより深いつながりを持ち、共感できる力を育み、課題解決に取り組んでいく。福島のことを自分のこととして考える。福島をエンパシー教育の最先端の地にしたいですね。もうひとつは、海外の大学院で通訳の勉強をしている大学院生を対象にしたF.A.P.です。オーラルヒストリーをどのように通訳で伝えていくか、共に研究していきたい。そして、これからの人材育成に努め、F.A.P.から福島と世界の架け橋になる新渡戸稲造が生まれることを期待しています。



常に変わり続けるニーズに 変わらない想いで応えていくために

鈴木 団体を設立したのは2011(平成23)年5月ですが、3月中旬から福島大学の学生たちが避難所で活躍していました。最初に集まったのが27人。最終的に避難所に関わった学生は約80人です。4月初旬に「次のステップをどうしよう」という話になったときに全員が「続けたい」と言うので、私から提案したのが「災害ボランティアセンター」です。「これから先はいろんなニーズが降って湧くから、サークル活動ではなくて、課題を一手にコントロールできるような強いセンターにしなければならぬ」と話したところ、学生たちも賛同してくれて、次の瞬間には動き出していました。

鈴木 原発事故による避難生活では、家族、子ども、地域コミュニティ、産業なども含めて多岐

神 3月11日当時、私は大学1年生でした。「大学に避難所開設する」という連絡を受けて、家が近かったのでボランティアに参加しました。そこでは炊き出しをしたり、子どもたちと遊んだりしていて、典夫先生が「避難所の中では、みんなが家族だと思おう」と言っていて、私もそう思って接していました。浜通りから必死に避難してきた方たちの表情は最初は険しくて辛そうだったのですが、少しずつ笑顔に変化するのがうれしかったのを覚えています。避難所に悲壮感はなく、学生みんなが明るく楽しく、運営に関わっていました。

——福島大学災害ボランティアセンターは震災・原発事故直後に立ち上げたのでしょうか。

行政政策学類 教授

鈴木 典夫 (写真前列右)

1961年生まれ。福島市出身。同志社大学院文学研究科社会福祉学専攻修了。主な研究分野は地域福祉、コミュニティワーク。阪神・淡路大震災で京都市社会福祉協議会地域福祉活動専門員として支援業務を行う。1999年福島大行政社会学部助教授、2011年同大行政政策学類教授、福島大うつくしまふくしま未来支援センター地域復興支援部門ボランティア育成も担当している。

災害ボランティアセンター 10 期ゼネラルマネージャー

竹内 瑛祐 (写真後列左)

宮城県大崎市出身。2017年に福島大学経済経営学類に入学(現役3年生)。災害ボランティアセンターの活動を通して、少子高齢化が進む地元の課題に向き合うようになり起業を考えるようになった。

災害ボランティアセンター 6・7 期ゼネラルマネージャー

吉田 小花 (写真前列左)
(旧姓: 狗飼)

福島県川俣町出身。2014年に福島大学行政政策学類に入学。卒業後は会計事務所に勤務し、災害ボランティアセンターでの経験を「クライアントの立場に立った提案」に活かしている。

災害ボランティアセンター 2・3 期ゼネラルマネージャー

神 貴大 (写真後列右)

福島県福島市出身。2010年に福島大学人間発達文化学類に入学。卒業後は、特別養護老人ホームで介護福祉士として勤務。

にわたる問題が広がっていくことが予想されて「一過性の取り組みで完結することはない」と早い時点で気づいていました。1年後、3年後、5年後、10年後に新しいニーズが必ず生まれるはずなので、それを見越した活動が求められるわけです。福島大学の避難所が4月30日に終わりましたので、その後は学生たちも戦に向かう武士くらいの勢いでボランティア活動に取り組み始めました。5月初めには相馬市に足を運んで、被災地でも積極的にコミュニケーションを取っていたので、自然とニーズが集まっていました。机を囲んで考えることに時間をかけるのではなく、すぐに現地に行つて五感で捉えて、どうやるのかを考えていくと次々と活動は回っていきます。

神 皆さんが避難所から仮設住宅に移ってからは、私たちもサロン活動で足湯などを通じて、多くの方たちとコミュニケーションを取ってきました。私のモットーは「笑顔のループ」。自分が笑顔でいると、周りの人もつられて変わることがあります。本当は教員になるつもりで大学に入学したのですが、センターの活動で高齢者と関わるが多くなり、その延長線で介護の仕事に就いて、現在は介護福祉

士として働いています。母子避難で離れて暮らすようになった家族と一緒に過ごすきっかけを作ろうと開催した「家族キャンプ」の参加者とは今でも交流があります。

—— 震災・原発事故後に入学した吉田さんが災害ボランティアセンターに参加したきっかけを教えてください。

吉田 私は川俣町出身で、福島大学災害ボランティアセンターをメディアで見えていて、被災地のために何かしたいという思いから福島大学に入学しました。

鈴木 災害ボランティアセンターの活動を見て福島大学を目指したという学生が何人かいますね。また、「ふくしま子どもフレッシュサマーキャンプ」や「集まれ！ふくしま子ども大使」に参加した当時の小学生が今大生になって災害ボランティアセンターに参加してくれたりもしています。

—— 振り返ってみて、一番印象に残った活動を教えてください。

吉田 3年生のときの「いるだけ支援」です。復興公営住宅などに移る人が増えて、閑散としてきた仮設住宅に私たち学生が住ん

で、4カ月間、住民の方たちと生活を共にしました。ラジオ体操に参加したり、散歩がてら住民の方のお宅でお茶を飲んだり、いわゆる普通のご近所付き合いです。住民の方には「学生に俺の気持ち分かるものか」と言われることもありましたが、世間話の合間に「私たちは、これからどうなるんだろうね」という本音が聞けることもありました。

鈴木 「いるだけ支援」は、福島市内の仮設住宅2カ所で実施し



「いるだけ支援」学生の引継ぎで住民への感謝(上)
(手を取る子どもとの姿が信頼を表している)

「いるだけ支援」日常の中での住民とのふれあい(右)



ました。最初は2カ所とも学生を受け入れてくれない住民の方がいっぱいでしたが、少しずつ心を開いてくれました。すべてを失った人の心の中に芽生えた何かが生活の糧になることがあります。それが「いるだけ支援」の効果です。本人の気力とか意欲を引き出す関わり方は、福

祉的なメソッドでいうとエンパワメントという言葉で表現され、それは私の専門的な研究分野でもあります。単発的な付き合いを「継続的」にするのではなく、「連続性」をもつて関わることでできるのは、地元福島大学ならではの取り組みです。

吉田 単発的に仮設住宅に行っても「来てくれてありがとう」と言ってもらえましたが、それは一時的なことで、実際に住んでみないと分からないことは多いと感じました。ちょうど仮設に残っている人たちが「自分だけ取り残されている」と感じていた時期で、不安な気持ちは初対面の人にはなかなか話しくいと思います。学生の私は傾聴することしかできませんでしたが、「話をしたら心が軽くなったよ」と言ってもらえることもあって、来てよかったと思えました。この経験を通して、今まで以上に相手の立場に立って、気持ちを受け止めて行動するようになりました。

神 参加するメンバーが違ったり、活動内容が変わっても「福島大学」の名前で入って行くのが大事だったのかなと思います。「福大の人が来てくれた」と、住民の方たちも安心して活動を受け入れてくれたのだと思います。



一人ぼっちにさせない。集い型の「福茶サロン」、歳月を考えた「季節の集い」

—— 時間が経つごとに活動内容が変わっていったのです。

鈴木 ずっと炊き出しや土砂かきなどのニーズがあるわけではないので、学生は先輩たちの真似をするだけでは活動が続いていくことはできないのです。つまり、センターに通底するものに基づいた新しい活動や自分たちの工夫が必要になってきます。4年間でメンバーは卒業して更新するのですが、それでも「福大はブレないよね」と言ってもらえるのはうれしいことです。

—— 通底するものを言葉にする、と、どういう表現になりますか？

鈴木 引き継がれているのは「孤立して死ぬことをさせない」「災害起因の（病気になる）死ぬことをさせない」「自分で死ぬということをさせない」という考え方です。

竹内 私は現在3年生で、入学時から災害ボランティアセンターに関わっているのですが、やはり活動の目的は、そこに行き着くと思っています。

—— 学生が関わることで、孤独死、関連死、自死が防げるということですね。



鈴木 福島県内に最大時約196カ所の仮設住宅があつて、災害ボランティアセンターは27カ所と恒常的に付き合つてきました。民間借り上げ仮設住宅含め最初の4年間に約1000人の孤立死があつたと言われていますが、私たちが関わっていた仮設では4年目に1件だけでした。こういう話をすると、「学生さん頑張りましたね」と言われがちなのですが、そうとも言い切れません。頑張ったのは、あくまで仮設住宅に住んでいる方たちで、学生はその力を引き出すきっかけを作ったに過ぎません。

竹内 私がセンターに参加したのは、入学時のガイダンスを見て楽しそうだったからです。「1回だけ試してみるのもいいけれど、継続した先に見えてくるものがあ

るから続けてほしい」という言葉が心に残つていて、今は自分でも後輩たちにそう伝えていきます。現在の活動のメインは、復興公営住宅の集会所でお茶会だったりイベントへの参加などで、ずっと「楽しいから」続けています。

—— どういったところに楽しさを感じますか？

竹内 新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、少し活動の間が空いてしまったのですが、久しぶりに会った住民の方たちが、うれしそうな表情をしてくれると、それだけで楽しい気持ちになります。どちらかというと、住民の皆さんが学生たちを育ててくれているような関係性が続いています。たとえば、芋煮会を開催したりすると、学生がうっかり忘れていた材料

を持ち寄ってくれたり、味付けを教えてくれたりするので、実際は教わることばかりです。ただ、「楽しい」で終わるのではなくて、住民の皆さんの10年後、20年後まで考えを巡らせながら関わっていくことが大切で、先輩たちが築いてくれた関係性を、私もさらに後輩にもつないでいかなといけませんと思っています。

神 私も避難所から始まった人間関係で大学生活を楽しく過ごせました。学類や年齢も関係なく交友関係が広まって、他県の学生や社会人でボランティアを手伝ってくれた人との付き合いは今も続いています。

吉田 卒業生が縦のつながりで違和感なく話ができるのも共通することがあるからです。

鈴木 ボランティアは楽しくないとダメです。災害ボランティアセンターの関係性は「おたがいさま」が基本で、若い学生たちは年長者にいろんなことを教えてもらえる。心理的な交歓がスパイラルになるのが双方にとっていいわけです。つまり、「普通づきあい」が大切になってくるということなんです。「楽しいから参加する」「あの人に会えるから行く」。

それが無償で、かつ自主的であれば周りからボランティアと評価されるにすぎないわけで、ボランティアという言葉が行動の目的ではありませんからね。

—— 10年目の節目にコロナ禍で活動に影響はありますか？

鈴木 10年が経った今、被災者は「震災・原発事故の経験を背

負った一人の生活者」になっています。阪神淡路大震災の教訓を追隨して、福島も「見放すことはしない」ことが重要で、コロナ禍の状況でも、次につながる活動をする必要があります。そこで、予防しながら活動を再開したり、オンラインでサロンを試験的に始めたりしています。このオンラインは思った以上に大変です。機器の操作をサポートしなければならぬし、高齢者はオンラインだと一歩引いてしまう。それでも、孤立死を防ぐために、安否確認のシステムを作つていかなければならない段階なのかもしれません。少ない予算のなかで、タブレットを揃えたり、スピーカーを準備したりしているとあります。

—— 学生たちに伝えたいことは何ですか？

鈴木 センターのゼネラルマネージャーが卒業した後に、アンバサダーという肩書きで現役学生を応援する団体が立ち上がったとしています。私は常々「やりたいことがあるならどんどんやってみたら」と言い続けています。「何かあつたら責任は取るから」と。その言葉の裏側にある「みんなを信頼しているから」という気持ちは、10年前からずっと変わらずに持ち続けています。



OECD東北スクール、 地方創生イノベーションスクールが 育んだ若者たちの可能性

椎名 私がプロジェクトに参加した動機は、外の世界を見てみたいという気持ちから、パリに行けるということ、また、被災

した地域で被災した福島・宮城・岩手から中高生が参加し、世界へ東北をアピールすることを目的に2012(平成24)年に開始され、2年半にわたったプロジェクト学習です。締めくくりにエッフェル塔前の公園で東北復興祭(環WA)・E・PARISを学生たちの手で開催して成功を収め、椎名さんはそのイベントのまとめ役として活躍しました。



東北復興祭 in PARIS。エッフェル塔の前でお世話になった方々と記念撮影

した地域の学生として、何か発信できる場を探していたというふたつでした。そして、活動が始まり、参加者と顔を合わせるうちに、いわき市内でも震災の被害の程度に差があり、岩手や

——地方創生イノベーションスクール2030の前身プロジェクト「OECD東北スクール」について教えてください。

七島 OECD東北スクールは、

地方創生イノベーションスクール2030
福島チーム運営事務局長

七島 貴幸 (写真右)

福島県福島市出身。福島大学卒業後は県立高校講師を経験の後、民間の教育機関において主にICT活用分野で開発及び運営を行う。東日本大震災の翌年からOECD東北スクールの運営事務局長として中高生をサポート。現在は後継事業である地方創生イノベーションスクール2030 福島チーム運営事務局長を務める。

行政政策学類1年
地方創生イノベーションスクール2030
福島チーム学生サポーター

本多 美久 (写真中央)

福島県福島市出身。2020年福島大学行政政策学類に入学。高校生のときに福島市を創る高校生ネットワークにて生徒リーダーとして活動。大学入学後は学生スタッフとして「これまでとは違う視点」で活動中。

経済経営学類卒業生
地方創生イノベーションスクール2030 サポーター
OECD東北スクールOG

椎名 紬 (写真左)
(ビデオ会議で参加)

福島県いわき市出身。2016年福島大学経済経営学類に入学。2012年から7年間、高校生として参加、大学生サポーターとしても関わった。卒業後はコンサルティング会社でビジネスコンサルタントとして勤務予定。



台湾のパートナー校の文化祭に参加して福島現状を伝えた

宮城ではさらにその差が大きいのことを痛感しました。また、プロジェクトに対する想いも様々で、仲間に対する理解やプロジェクトへの責任といった気持ちも芽生えてきました。もちろん参加者同士の衝突も度々ありましたし、心が折れるようなこともありましたが、そんなときは、七島さんを始め、学生サポーターや地域・企業の方々が私たちの考えを尊重しながらサポートしてくださいました。私たちは当時「巻き込み力」と言っていました。一生懸命さが一番の取り柄である若者に、可能性を感じ、大勢の大人が力を貸してくれたことが何よりうれしかったですね。

——本多さんは中高生のときにプロジェクトに参加して、どう感じましたか？

本多 中学生のときに携わったプロジェクト活動を振り返ると、私も仲間との温度差に悩みました。また、考え方が違う相手に対してどうやって最適解を導き出せばいいのか、その方法をいろいろと試す時間だったと思います。

地方創生イノベーションスクールでは、OECD東北スクールの対象だった被災3県から日本全国、そして海外へと拡大し、世界的課題を各地域の中高生がアプローチの段階から考えて取り組むものに発展しました。このスクールでの活動は様々な地域や国の学生と交流を深めることができ、そこから新しいネットワークが生まれています。活動エリアや内容が広がっていく中で、他者をどのように理解すればいいのか、サポート側にまわった今も勉強中です。

以前、参加者の高校生から市役所へまちづくりについて提言する機会がありました。1回目は準備に私がかかり手助けをしすぎてしまいました。そもそも、高校生にとって成功も失敗も大切な経験であり、主体性をもって何事にも挑戦することが重要だったのです。そのため、2回

目はほとんど本人に任せたところ、自分の力で一生懸命に伝えようとするその姿は、市役所の方の胸を打ち、自分のことのようになんかうれしかったです。このような機会は学校では味わえない貴重な経験です。「社会人を相手に自分の力を試すことができたのだから、次もできるはず」という自信は、本人にとって大きいものだったと思います。また、私にとってもサポートの難しさを学んだ経験のひとつとなりました。

椎名 活動の中でしか発見できないものがありますよね。つたなくても絞り出す言葉や雰囲気は人の心を動かします。私も最初に「パリで東北をアピールするイベントを開催せよ」と最終目標を伝えられたときは、何から始めたらいいのか全然思いつかなくて。仲間と四苦八苦しているときに、社会の第一線で活躍する大人がさりげなくヒントをくださり、また、大人の正解と押しつけず、プロジェクトの方向性を私たちに任せてくれたことは有り難かったですね。

いま私がビジネスコンサルタントとして社会人をサポートすることになった原点としても、学生時にプロジェクトへ携わったことが大きいと思います。苦業を共にしながらプロジェクトを立

ち上げる面白さに魅せられてしまったというか。社会人としての能力を身に付けて、昔私がしてもらったように、次は私が学生に上手に接することができれば、持続的な輪を作ることができますね。

——新しい世代にバトンを渡すということですね。

本多 私も生徒が必要とする手助けを上手く差し伸べられる大人になりたいです。将来は生まれ育った福島市のまちづくりに携わりたいと思っています。業種は地方公務員、NPO、研究者、商店経営など様々ですが、その中でどれを選ぶかは、大学生活の中でじっくり決めたいと思っています。多様な選択肢の中で自分なりに将来を考えることができるのは、全世界にいる同世代の仲間や中高生、社会で活躍する大人たちと数多く接してきた経験があるからだと思っています。

七島 二人とも大人のサポートに感謝してくれていますが、こちらも若者たちが必死で取り組む姿から、貴重な学びを受け取っています。先ほど本多さんが話していたまちづくりの提言は、福島チームが開催した「福島市高校生フェスティバル」で地域の方々から吸い上げた意見です。



福島市高校生フェスティバルの立ち上げ

1回目は「フェスティバルの立ち上げ・企画」、2回目は「水害」、今年は「新型コロナウイルス感染症」と、その年の課題を自分たちの創意工夫で開催へと漕ぎつけています。彼らが活躍する2030年は社会構造の変化や、未曾有の課題があるかもしれません。その課題に直面したとき、学生時代に仲間と協力してくれる大人とプロジェクトに取り組んだ日々は、大きなアドバンテージになるはず。課題に立ちすぐむのではなく「一緒に考えて行動しよう」と声を掛けられる人材として、世界に羽ばたいてくれると信じています。